

## 組織目標評価報告書（令和2年度）

14

部局名：

大学院自然科学研究科

部局長名：

鶴田 健二

目標・取組		目標・取組の実施状況(成果)及び新たに生じた課題等 (部局での検証とそれに対する取組)
<b>①教育領域</b>		
	関連する 年度計画の番号	教育領域における目標・取組の実施状況及び新たに生じた課題等
<p><b>教育の実施体制(組織的なFD, 教員のインセンティブ向上)について</b></p> <p>(1)FDに係るフォーラム等への積極的な参加を促し, 教員のより一層の資質向上をはかる。 (2)サバティカル制度の導入促進を継続する。外国人教員や女性教員の採用については, 研究科のアクティビティの維持向上を図りながら, 可能な限り増加するように努める。</p> <p><b>教育方法・内容について</b></p> <p>(3)研究倫理, 安全衛生, セキュリティ教育について強化を図る手立ての検討を継続する。 (4)前期課程では, 学力保証のため複数の講座・専攻等が合同で中間発表を行うなど, 達成度を相互に確認する。また, レベルの向上の効果と, 一定の普遍性を有する教育の実施について検討を進める。 (5)FlexBMDコース等により学士課程, 博士前期, 博士後期課程のシームレスな接続を図るとともに, SDGsも視野に入れて専門分野を超えた異分野融合教育を推進する。 (6)学位取得条件の明確化及び学位審査厳密化を継続・実施し, その効果を検証する。 (7)短期交換留学生受入プログラムIMAC-Okayamaや国際会議発表等により国際化を推進する。 (8)複数教員による実質的な指導体制を学際基礎科学専攻で試行する。</p> <p><b>教育の成果(学習の成果, 卒業後の進路)について</b></p> <p>(9)卒業生, 修了生の就職・進学率の調査により, 学習の成果の検証に努める。 (10)優秀学生へ研究科長表彰を実施し, 学習と研究活動への取り組みを奨励する。</p> <p><b>学生支援について</b></p> <p>(11)学生総合支援センター等と連携し, 種々のプログラムを活用して進路選択を支援する。 (12)奨学金助成情報の収集と発信に努めるとともに, TA・RAの雇用機会を増加する。 (13)博士後期課程学生に対して学生研究奨励支援制度等を実施する。</p> <p><b>国際共同による教育の促進</b></p> <p>(14)大学間, 部局間協定, Erasmus+などを活用し, 海外の著名大学との実質的な交流を行い, またその拡大を図る。</p> <p><b>外国人留学生の受入状況について</b></p> <p>(15)中国赴日教育などへの積極的な協力による留学生の受入拡大を図るとともに, 協定校からの短期インターンシップなど留学生の受入れを含め, 留学生の受け入れを促進する。 (16)英語による授業科目の増加を進めるとともに, 短期交換留学生受入プログラムIMAC-Okayamaコースを活用し, 留学生受入れの増加を図る。</p> <p><b>その他</b></p> <p>(17)マッチングドクターシステムの活用等により社会人学生の入学を促すとともに, 説明会等の実施により入学定員確保に努めるなど, 大学院のリカレント教育を推進する。 (18)選抜方法の整備改善を進め優秀な学生の確保に努める。 (19)外部評価による「教育の質保証」に関するPDCAを組織的に行う体制の整備を検討する。</p>	9-1,89-1,90-1  3-1  51-1  53-1  10-1  26-1  26-1 15-1	<p>○ 博士前期課程の複数指導体制を実質化した。</p> <p>○ 学位審査厳密化の一環として, 単位取得満期退学者などの審査対象基準の研究科統一を行った。</p> <p>○ 本年度博士前期課程に進学した大学院生を中心にFlexBMDコースへの学生登録を推進し(本年度29名), 学部教育からのシームレス教育を推進するとともに, 博士後期課程への早期の学生確保につなげる道筋を強化した。</p> <p>○ IMaC-Okayamaプログラムを継続し, コロナ禍で来日の可否が不透明な状況下にもかかわらず春コースへは3人の登録があった。また, 秋コースも新設し, 海外からの留学生受け入れが可能となればすぐに対応できる体制を整えた。</p> <p>○ 認証評価に向けた自己点検の一環として, 修了後5年以内の修了生へのアンケートを実施し, 学習成果の検証を行った。</p> <p>○ 奨学金助成などの学生支援情報, 特に博士後期課程への進学を促す情報を常に周知した。具体的には, 民間助成金の情報を指導教員を介して周知すること, 推薦枠がある場合に基準の制定を行った。また, OUフェローシップへの積極的な応募を促し, 並行して, 現在の博士前期課程1年次の学生へ向けて同制度を活用した進学誘致の積極的な取組を各講座に働きかけた。</p> <p>○ 新型コロナウイルス禍で実際の人的交流が滞る中でも, 国際交流協定締結を積極的に推進し, 本年度に13件の新規締結・継続(調印待ちを含む)を行い(2019年度10件), 留学生受け入れを途絶えない体制づくりに努めた。</p> <p>○ 本年度発足した自然科学研究科国際関係委員会の取組を通して, 文部科学省国費留学優先配置枠の確保に成功した。</p> <p>◎ コロナウイルス感染防止のための活動制限下で学生が登校できない状況下での, オンラインによる大学院のコースワーク・研究指導活動を支援した。その甲斐あって, 感染者を出さずに博士学位論文審査, 博士前期課程修了審査を無事完了することができた。</p>
<b>②研究領域</b>		
	関連する 年度計画の番号	研究領域における目標・取組の実施状況及び新たに生じた課題等
<p><b>研究水準及び研究成果等について(HPで可視化を促進する)</b></p> <p>(1)戦略的重点プロジェクト研究及び新分野の創成を目指す基礎および応用研究を推進する。 (2)現在世界的に高評価されている研究の継続的な発展を図る。 (3)論文誌掲載やシンポジウム・研究会の開催などにより研究成果の公表を促進する。 (4)知的財産本部およびURAと連携した知財の獲得を推進する。</p> <p><b>研究実施体制等の整備について</b></p> <p>(5)外部資金獲得のため, 専攻や講座の枠を超えた水準の高い研究プロジェクトの編成を促進し, HPで可視化を促進する。 (6)複数の先進研究者による研究科内研究拠点体制を一層整備支援するとともに, 卓越的研究(個人あるいはグループ)を支援する。 (7)共同研究・部局間, 大学間, 企業との共同研究に加えて, 国際共同研究の推進を図る。 (8)女性・外国人研究者の受入: 研究活動の維持向上を図りつつ, 可能な限り外国人教員や女性教員の採用を増加するように努める。女性教員の広報への露出頻度を増やす。 (9)外国研究機関における研究従事: Erasmus+や大学間・部局間協定等を活用した国際交流に努めるとともに, サバティカル制度の実効的導入や外部資金による海外での研究従事の促進に努める。</p> <p><b>その他</b></p> <p>(10)科学研究費の採択率向上のため, 研究科内WGを立ち上げ, 情報共有と事前添削等を推奨する。また, 全学科研費部会と協力して申請状況の確認と呼びかけを行い, 申請率100%の達成を目指す。また, 産学官連携等による研究の推進も進め, 共同研究費, 受託研究費等の外部資金獲得を促進する。 (11)RA経費を確保して, 研究の推進と学生への経済支援, 修学の便宜を図る。</p>	27-1 36-1  32-1 38-1  48-1 70-1  51-1 37-1  3-2	<p>○ 研究科長裁量経費プロジェクトとして, 下記を支援した。</p> <p>・学際研究奨励事業・・・戦略的重点プロジェクト研究の支援とともに, 学位プログラム化につながる学際的研究チームの取り組みを重点的に支援した。(6件)</p> <p>・若手教員研究支援・・・40歳未満の若手教員で, 科研費採択に至っていない萌芽的研究を支援し, 若手教員を研究面でエンカレッジした。(5件)</p> <p>・科研費セーフティネット・・・昨年度に引き続き, 研究科独自の同事業を実施し, 科研費(基盤研究C, 挑戦的萌芽, 新学術など)の評価が「A」で不採択であった研究プロジェクトの次期採択の後押しとなる支援を行った。(8件)</p> <p>○ 昨年度に引き続き, 研究科科研費ワーキングによる申請・採択状況分析とその情報共有, および申請締切前の添削を行い, 科研費獲得促進の継続をはかった。その成果として, 新学術研究が学術変革領域に変わることに伴い, 応募できる枠が少なくなっている状況にも関わらず, 研究科全体として応募件数を昨年度並みに維持できた。また, 本研究科が関わる4つの分野の新規採択状況において, 過去3年間の累計数上位10機関に岡山大学が入った。</p> <p>◎ 緊急事態宣言発令下での研究維持活動の指針を作成し, 進行中の研究活動を最低限維持し, また外部との共同研究の多くを継続させることができた。</p>
<b>③社会貢献(診療を含む)領域</b>		
	関連する 年度計画の番号	社会貢献(診療を含む)領域における目標・取組の実施状況及び新たに生じた課題等
<p><b>地域社会との連携, 社会貢献について</b></p> <p>(1)基礎学部と協力して高大連携事業を促進する。 (2)研究科教員による, 地域と連携した各種講演会や研究会等の開催を支援する。 (3)ホームページ・広報誌等を利用して教育・研究情報を海外にも発信する。 (4)留学生と地域社会との接点を増やす可能性を探る。</p> <p><b>国際交流・協力について</b></p> <p>(5)研究科教員による国際会議・セミナー開催を支援する。 (6)外国人研究者の招聘・訪問を促進する。 (7)部局間および大学間交流協定の締結を拡充する。</p> <p><b>その他</b></p> <p>(8)マッチングドクターシステム等を活用し, 企業・自治体等との研究・人材育成に関して連携を強化する。</p>	47-1	<p>○ 研究成果をより見える化し, かつ, 優秀な海外留学生誘致を促進すべく, 海外向け研究科ホームページを刷新した(R03.04.01から公開)。</p> <p>○ 前項にも関係して, 英語以外の言語(中国, タイ, ミャンマー, ベトナム, インドネシア)を母国語とする留学生に研究科ホームページの翻訳業務を依頼し, 優秀な留学生誘致に努めるとともに, コロナ禍で困難な留学生への経済支援にも資する事業を本年度試行した。(次年度も継続予定)</p> <p>○ 新型コロナウイルス禍で物理的交流が滞る中でも, 海外との教育研究交流を積極的に推進し, 昨年度10件であった国際交流協定締結の新規締結・継続を, 今年度は13件(調印待ちを含む)まで拡張できた。また, 本年度からO-NECUSの博士後期課程プログラムへの参画を決定, 中国東北地域からの留学生確保の体制も構築できた。</p> <p>○ マッチングドクターシステム(MDS)による共同研究と, それによるリカレント大学院教育となる博士後期課程入学者を1名確保できた。</p>
<b>④管理運営領域</b>		
	関連する 年度計画の番号	管理運営領域における目標・取組の実施状況及び新たに生じた課題等
<p>(1)部局運営体制: 運営体制を不断に精査し, 必要に応じて改善・強化を検討する。 (2)グローバル人材育成院・国際部との連携により, 教育・研究の国際化を推進する。 (3)ダイバーシティの推進(女性教員・外国人教員比率・次世代育成支援等): 女性教員, 外国人教員比率について, 研究科内で実情を把握し, 目標数の達成に向けて努力する。 (4)効率的・戦略的な予算配分・執行: 予算配分については効率的かつ戦略的な配分方法を検討するとともに, 経費節減に努める。 (5)安全衛生に対する配慮: 基礎学部の安全衛生委員会との連携を強め, 研究科内の安全衛生管理の強化・効率化をはかる。 (6)施設整備の推進: 科内施設の整備を検討し, 既存施設設備の有効利用に努める。 (7)法令遵守の徹底: 関連したセミナー, e-learning等を通して法令遵守の徹底を図る。 (8)職場環境: ハラスメント防止等に努め, 適正な教育・研究及び職場環境の実現に努める。 (9)学位プログラムの導入に向け, 研究科内での迅速な情報共有と議論の醸成をはかる。特に, 環境生命科学研究科との緊密な連携を加速して魅力あるプログラムの構築を目指す。</p>	70-1  89-1 88-1 93-1	<p>○ 自然科学研究科棟で多発していた排水異常の原因を解明すべく, 研究科棟全室の排水種類揭示状況確認を実施, オープンラボとして使用している実験室等に誤認箇所が多数あることを突き止めた。</p> <p>○ 学位プログラム化に向け, 専攻長会議(代議員会議)及び教授会で常に進捗状況を情報共有し, 学務委員会において具体化に向けた検討を開始し, 育成すべき人材像の案を作成した。また, 当該作業を加速する検討ワーキングを発足した。</p> <p>○ 昨年度の課題としてあげていた, 留学生の受入など国際交流関連および大学院の広報を自然科学研究科が中心となって基礎学部とも連携がスムーズになるような体制構築を, 「自然科学研究科国際関係委員会」という形で組織化し, 主にオンライン・メール(チャット会議で情報共有や国費留学プログラム申請を実施した。その成果として, 文部科学省国費留学優先配置枠の確保に成功した。</p> <p>◎ 緊急事態宣言解除後の研究活動再開のための RA, BCS, BCPを発行プロセスを整備, 研究室からの申請をチェックし, コロナ感染症の拡大を未然に防止しつつ教育研究活動の再開を遂行した。また, 緊急事態宣言の発令が継続された場合に備え, 志願者が来学できない場合の大学院入試の実施体制を種々検討した。</p>